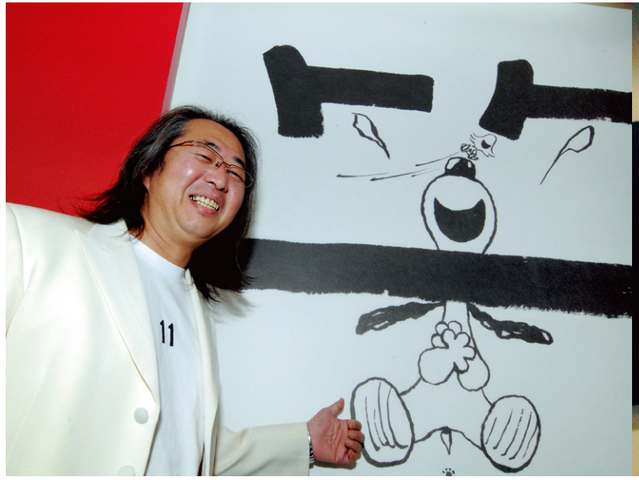
▼シュルツミュージアムの元スタッフ小野寺美樹さん。今回の日本での展覧会で展示案内を担当。

▶愛知万博で来館者の前で制作した巨大スヌーピー。全長2kmの針金で作られている、



▲右上・「かわいい！」という声も。真っ白な上着の後ろにはスヌーピーの顔が描かれていた。左上・「笑う門には福来る」の作品の前で。大谷さんもにっこり！

▲後ろに見えるのは「2006年・アートフォーラム四日市」で制作した「歌舞伎スヌーピー」

巻頭特集

アーティスト

大谷芳照

独自の感性でスヌーピーの世界を描く

スヌーピーの生みの親・チャールズ　M.シュルツ氏と親交をつちかったアーティスト大谷芳照さんの作品。日本語と墨で描いたピーナッツの世界はスヌーピーファンだけでなく多くの人の心をとらえました。鈴鹿出身の大谷さんのアートに対する熱い思いを聞きました。

▲「ホット一息」2004年

▲「口いっぱいのしあわせ」2003年

アメリカと日本で結ばれた友情

スヌーピーが日本の文字と一緒に筆で和紙に描かれる。生き生きとした「ピーナッツ」のキャラクターたちが紙の上で自在に動きまわる。熱心なファンが作品をじっと見入る姿があちこちで見られた。ここは名古屋市中区の松坂屋美術館で開催された「PEANUTS FOUND IN TRANSLATION　大谷芳照が訳したスヌーピーの世界展」の会場。アーティスト・大谷芳照さんがスヌーピーの生みの親・チャールズM.シュルツ氏との友情で結ばれた証ともいえる作品展だ。

「ピーナッツ」は84年に世界75カ国、2600を超える新聞に掲載され、「世界一広く読まれるコミック」としてギネスブックにも認定されている。ピーナッツという題名を知らない人でもスヌーピーと聞けば誰にでも分かるだろう。

大谷さんに写真撮影をお願いすると「じゃあ、着替えてくる」と言って控え室に消えた。そして現われた時には白いタキシード姿。くるりと背中を向けると、そこにはタキシードの燕尾の形をいかして、スヌーピーの顔が描かれていた。「どう？」と茶目っ気たっぷりに笑う。

大谷さんとシュルツ氏の出会いは、日本に造られた「スヌーピータウン」の展示・内装を依頼されたとき。空間デザイナーとして、大谷さんは次々とスヌーピーなどのキャラクターを立体アートにしてシュルツ氏を驚かせる。「君は天才だ！」とその作品はシュルツ氏に絶賛され、次に再会したときシュルツ氏は大谷さんに「Yoshi」というアーティストネームを贈った。「僕は英語ができないし、スパーキー（シュルツ氏の愛称）は日本語ができない。だから僕たちはアートとスケッチによって心を通じ合わせた」。アメリカのマスコミは彼らを、言葉を交わさなくても理解しあうスヌーピーとウッドストックの関係と同じだと評した。「言葉は通じなくても親友になれる」と大谷さんはいう。シュルツ氏は大谷さんの「ピーナッツ」に関する業績をたたえて、自分の作品を何点も大谷さんに贈り、大谷さんがアメリカと日本を行き来して交流が続く。

その後、「チャールズM・シュルツミュージアム&リサーチセンター」の建設がアメリカで計画された。主要スタッフとしてミュージアム作りに参加をしてほしいというシュルツ夫人・ジーニーさんの依頼を受ける。シュルツ氏はミュージアムの完成を見ることなく他界してしまったが、大谷さんがシュルツ氏と共同で作り上げた「モーフィングスヌーピー」という43枚の木の板を重ね合わせたレリーフや4コマコミックを3588枚ものタイルに焼付けた壁画の大作が展示されている。

和紙と墨と文字で描くアート

02年にミュージアムが開館し、次に何をしようかと悩んでいた大谷さん。そんなとき「私は50年間毎日描き続けてきた。続けるということが大切です。Yoshi、僕は海の向こうから見ているから、Yoshiも作り続けなさい」と言ってくれたシュルツ氏の言葉を思い出した。「日本人にしか作ることのできないピーナッツの世界はないだろうか」

そして和紙と墨を使うことを思いつく。紙を広げて筆に墨をたっぷりとつけ、思い切って四角を描いた。それが口という文字に見えたので、中にクッキーを食べて満足そうにしているスヌーピーを描く。「口いっぱいの幸せ」という浮んだ言葉を添えた。「これは面白い！」と、それから半年間もアトリエにこもり毎日描き続けた。「出来上がった絵を持ってアメリカに行くと、それを見たアメリカ人は笑ってくれるんだ。『ほっと一息』という作品を見て、温泉に入ってリラックスしている様子でしょう？とすぐに分かってくれた。漢字は読めなくてもちゃんと伝わるんだね」

シュルツ氏が描いた愛や勇気

大谷さんは鈴鹿にアトリエを持っている。「シュルツミュージアムのあるカリフォルニアのサンタローザは、山があってワイン畑があって海がある。鈴鹿も山脈があり、田畑があって白子の海がある。初めてサンタローザの町に行ったとき、とても懐かしい思いがしたんだ。生まれ育った鈴鹿の町とよく似ていると思ったから。自然に囲まれた鈴鹿のアトリエに戻ると、すごく心が安らぐのを感じる」

今もなお世界中の人々から愛されるピーナッツのキャラクターたち。ピーナッツの世界には愛や勇気、友情が描かれているという。「シュルツ氏が50年描いていた世界感を、僕のアートで感じていただければうれしいですね」

協力／中日新聞社

大谷芳照 PLOFILE

1958年　三重県生まれ
1976年　三重県立四日市中央工業高校卒業
1978年　東京デザイナー学院名古屋校 スペースデザイン学科 卒業（現 名古屋デザイナー学院）
1993年　「スヌーピータウン」の計画に参加　「ピーナッツ」の作者チャールズ M.シュルツ氏と出会う。
1997年　「チャールズM.シュルツミュージアム&リサーチセンター」の計画に2002年まで参加
2004年　同ミュージアムで「PEANUTS FOUND IN TRANSLATION展」開催
2005年　愛知万博「夢見る山」で「スヌーピーライブ・パフォーマンスアート展」開催
2006年　「PEANUTS FOUND IN TRANSLATION 大谷芳照が訳した　スヌーピーの世界展」開催。

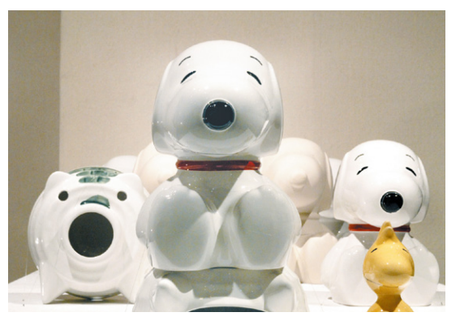
旧アトリエで絵を制作する大谷さん

大谷芳照が祝う 中日ドラゴンズアート・2006

中日ドラゴンズのリーグ制覇を記念して、ドラゴンズのマスコット・シャオロンを描いた「大谷芳照が祝う中日ドラゴンズアート・2006」が「GALLERY両口屋是清」で昨年12月26日まで開催されていた。交流のある川上憲伸投手をテーマにした「肝っ魂」や「日本一」を捕まえて」などドラファンにはうれしい作品が展示された。

PEANUTS FOUND IN TRANSLATION 大谷芳照が訳したスヌーピーの世界展

昨年12月26日まで名古屋・栄の松坂屋美術館で開催された大谷芳照アート展は東京などでも開催される。今後のスケジュールは、松坂屋銀座店3月28日ー4月10日・松坂屋静岡店5月23日ー6月4日・仙台三越9月11日ー9月17日。チャールズ　M.シュルツミュージアムで04年11月から05年4月まで展示された45点を中心に新作11点を加え56点を公開。さらに大谷さんの業績を称えて作者シュルツ氏から贈られた原画なども。



▶SNOOPYグランドアート・2006萬古スヌーピー＝蚊取り仕様＝ 06年の戌年にちなんで2006体の蚊取りスヌーピーを制作した

CHARLES M. SCHULZ MUSEUM
PEANUTS © United Feature Syndicate , Inc